



# 診察室の午後

白浜はまゆう病院  
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

以前、複数の医学部や医科大学の研究者たちが行った医師主導の臨床研究で、某大手製薬会社が関与して不正が行われた事件が報道された。

同社の高血圧治療薬が、脳卒中や狭心症に対して予防効果があると結論付けたその研究論文に捏造(ねつぞう)や改ざんが見つかり、後に論文は撤回された。それまでに、その薬は大きな収益を上げていたとのことである。さらに、その製薬会社の社員が、当時私が勤務していた大学の非常勤講師として、研究のデータ解析にあたり、この不正に関与したことも明らかになった。

事件を受けて、私が勤めていた大学の医学部では、全教員、全大学院生が「NPO法人日米医学教育コンソーシアム(CITIJ span)」が作成した研究倫理のeラーニング(インターネットを通じて学習する方法・講座)を各自受講するように指示された。

教材はよくできており、「責任ある研究行為：基盤編」「人を対象とした研究：基盤編」「研究の安全性」などといった内容を受講した。それなりに勉強になった。

## 〈30〉「科学的不正」

一般に、研究結果は論文として学術雑誌に掲載され公表される。論文には、査読と言う審査のシステムがあるが、性善説に基づいて行われるため、審査の段階で不正を見抜くのは難しい場合がある。冒頭の事件は、巨額の利益が絡み、識者の目を引くものであったため不正が発覚したのだから。

一方、権威ある医学雑誌ほど審査は厳しい。しかも、査読者は研究の競争相手であることもある。実験では、完璧にきれいなデータがなかなか出ないこともある。正直に考察を加えても、査読者はデータの矛盾を突いてくる。査読を受けて論文を改訂する際に、自説を控えて査読者の意向に沿った内容に変更したりすることもあるのではないだろうか。このような事情も小さな不正への誘惑となり得ると考える。

結果を要求される現代では、研究業績は研究を継続するためには必要であり、昨今はその内容よりも論文数や論文が載った雑誌のインパクトファクター(その学術雑誌に掲載されている論文がどの程度他の論文に引用されているかを表す数字)の合計で評価されることも多いようだ。また、人々は研究に有益性を期待し、さらに研究が利益をもたらす場合もある。

今思つと、大学院生であったころ、汗水流して何回も実験をやった小さな真実は、広い真理の大海の浜辺で見つけた、小さな貝殻のようにすがすがしく美しい。そして楽しい日々でもあった。